

岩倉使節団の見たパリ

福井 憲彦

まずはじめに、本日のお話の枠組みをはっきりさせておきたいと思います。といいますのも、私は一九世紀のフランス社会を中心に歴史の研究を行ってきましたので、その点では一応プロを自任しておりますが、日本史については素人であります。そのような、近代日本に関心をもっているフランス近代史の研究者が、岩倉使節団がたずねたパリについて、彼らはどういう目で見ていたのだろうか、ということこれから少し読んでいきたいと考えておりますものから、その点についてお話をさせていただきます。

岩倉使節団といいましたが、私は使節団そのものについて専門的に研究しているわけではありませんから、正確に申しますと『米欧回覧実記』に描かれたパリについて、ということです。お手元に『米欧回覧実記』（以下『回覧実記』と略記）のフランスにかんする全体の目次と、パリについてのいくつかの部分の抜粋を、岩波文庫版から取って配って頂きましたので、のちほどそれらに言及しながらお話をいたします。

岩倉使節団や、とくに『回覧実記』の史料としての意義については、この数十年來、大久保利謙氏とか田中彰氏を中心として、共同研究を含めてずいぶん成果があげられてきていることはよく知られていると思います。それから目黒の久米美術館には、『回覧実記』の著者久米邦武の関連史料が多く収納されています。私はまだ、研究書のいくつかを読んでいるにすぎません。いずれもうすこし時間にゆとりが持てるようになったら、もとの史料にもあたってこういう研究もしてみたいと思っていまして、今日はその走りの部分をお話することでご勘弁願います。

一

周知のことではありますが、使節団全体の関心は、明治における日本の近代国家形成のなかで、殖産興業をいかにはたすかという点に重要な力点があったわけでして、これはもちろん『回覧実記』の記述にも共有されています。ですから、鉄や石炭、鉄道や各

種の産業にかんする記述は全体として非常に多い。しかしフランスについては必ずしもそうでもないという点には、のちほど触れたいと思います。それから、各国の憲法とか法制の整備状況、行政体制、教育にたいする関心、これも使節団全体に共通するものでありますし、『回覧実記』にも共有されております。

また『回覧実記』を通して眺めていますと、もちろん国によってだいぶ差はありますが、基本的に都市にたいする関心の強さ、都市への眼差しの熱さという点も印象に残ります。これはもちろん明治の文明開化という課題意識に関係しているのでしょう。そして文明の拠点は都市であるという見方を、すでに彼らは取っていたということの意味しているわけです。これは非常に大きな特徴としてまず目につくところです。

これらについては、すでに日本史の研究者もいっておられますし、日本文学の研究で歴史にもずいぶん関わることをなさっておられた前田愛さんが、一九七六年に成島柳北についての本（朝日選書に再録）を出しておられますが、そのなかでも指摘なさっていることです。

幕末から明治の初頭にかけて、日本からずいぶん知識人だとか政治家が欧米に行っているわけで、この岩倉使節団もそのうちの一つですね。彼らが、欧米の制度や文物を克明に記録しようという熾烈な使命感に燃えていたことは、『回覧実記』からもよく伝わってきます。前田愛さんが指摘したように、彼らが持っていた漢文的な素養、叙述のスタイル、語彙などが、西欧の文化、文明のあり方と出会って、非常に緊張感をはらんだ文章表現を生み出すことになった。

実際に『回覧実記』を読むと、この前田さんの指摘はとても説得的なものとして実感されます。もっとも私などは、漢字かな混じりの漢文調の文章には、高校以来ほとんどおつきあいでいかなかったという状態でしたから、白状すれば、文庫本を読むのにも馴れるまでは四苦八苦でした。

久米邦武の『回覧実記』は、ご存じの方にはつまらない指摘ですが、岩倉使節団の公式報告書ではありません。なかば公的な性格を持った記録文だといえそうですが、読んでいると分かるのですけれども、けっして訪ねたところで記したことをそのまま報告として書いているわけではありません。公刊されたのは帰国してのち五年のことでした。おそらくその間に、追加的に学んだり、新たに手に入れた知識とか、あるいは実際に欧米で入手したものを処理したりしてまとめていると思われる箇所が、随所にあります。関係文書にあたれば、そうした点についてはもう少し正確に判明するのかもしれない。

もう一点、まえもって指摘しておきますと、政治制度などについては、制度の表面上の把握だけではなくて、それが生み出された背景にまで思考をめぐらしていることが、重要な特徴であるかと思えます。ヨーロッパの一九世紀、まあ近代といってもよいのですが、近代文明が持っているある種の合理性というものについての認識が、随所に明確に見て取れます。これが久米個人の能力なのか、岩倉使節団全体について言えることなのかは、私にはまだよく判断できませんが、とてもすぐれた点でしょう。

ただし経済とか社会、とくに文化のあり方の認識ということにな

ると、一種の「…人論」でおわっています。日本ではいまでも「人論」がしばしば流行りますが、久米邦武も随所でドイツ人はどうだ、フランス人はどうだ、ゲルマンは、イギリスは、と比較をしています。これが現象の指摘におわらずに、微細な内部的差異などにも目の届いた議論になってゆけば、学問的な比較文明論となる可能性もあるわけですが、残念ながら現象がどういうプロセスのもとに生成したのか、今風にいえばソフトのあり方には必ずしも目が届いていません。これはもちろん、滞在期間とか当時の情報量を考えれば、そこまで求めるほうが無理かもしれません。この点については、最後にまた触れることになりましょう。

二

使節団がパリに滞在したのがいつごろかと申しますと、明治五年一月一六日、西暦でいいますと一八七二年二月一六日に、パリに到着しています。そしてちょうどパリ滞在中に、日本で改暦がありました。つまり旧陰暦から、陽暦への変更がありました。これが二月に行なわれ、明治五年の二月三日が明治六年一月一日ということになります。ですから日本の暦でいえば飛びわけですね。そして新暦に変更したあと明治六年二月一七日に、西暦でいいますと一八七三年の二月一七日に、パリをあとにしてブリュッセルへと向かいますので、ちょうどほぼ二カ月間パリに滞在したことになります。その間の記録が『回覧実記』に跡を残しているわけです。

使節団がもっとも長く滞在した都市は、条約改正交渉もあったワシントンで、ついでロンドン、そしてパリは三番目です。ロンドン

がほぼ三カ月くらいでしょうか。一つの特徴は、これは久米邦武自身の行動がパリに集中していたことにもよるのかもしれないのですが、ほぼ四カ月滞在したイギリスのときには三カ月ロンドンにいて、あとの一月はマンチェスターはじめ、かなり各地の産業施設や都市をまわって、その記録を残しているのについて、フランスの場合にはもっぱら記録はパリに集中しています。伊藤博文とか何人かの団員は、パリからやや離れたところまで産業施設の参観にいったりしたようですが、基本的にはあくまでパリを拠点として、意識もそこに集中しています。すくなくとも『回覧実記』の記述ではそうですね。

ところで、彼らが二カ月滞在した時期というのは、パリにとってはどういう時代だったのでしょうか。ご存じの方も多いと思いますが、一八七一年の三月から五月にかけて、パリの市民、労働大衆が自治的な権力を一時掌握した、いわゆるパリ・コミューンという出来事が起こりました。それを、チエールという政治家が先頭に立って鎮圧して、そのほぼ一年半後に岩倉使節団がやってくる、という次第になります。この出来事にかんする記述やあるいはそれをうかがわせる記述は『回覧実記』にもかなり出てまいりますが、その基本的な捉え方は、パリ・コミューンというのは逆徒、ないし賊徒の仕業なり、というものです。それを鎮圧したチエールを、政治家として非常に高く評価しています。チエールを「田舎出身の小男で成り上がりを狙う」小物として散々こき下ろした同時代のマルクスの評価とは、ちょうど正反対です。ただ本日はそういう政治の話には立ち入りませんので、おもに都市空間としてのパリについての話に

限ってみてまいります。

パリ・コミュニケーションにともなう市街戦でもって、市内はだいぶ傷んでいました。宮殿のチュイルリー宮など典型的です。『回覧実記』にチュロリー宮と出てくるのがそれです。市庁舎なども復旧がおわってはいない時期です。しかし第二帝政下にはじめられた改造は進んでいましたから、新しい街路構造などの基本はかなり現実のものになっていました。パリ・コミュニケーションが起る直前、第二帝政のもとでナポレオン三世が当時のセーヌ県知事オスマンに命じて着手させた、有名なパリ大改造です。この改造は第二帝政だけで完結したわけではありませんで、その後も世紀末へ向かって継承されてゆきますが、岩倉使節団が滞在した時期には、その基本はできあがっていました。時間も限られていますので、その要点だけをざっと見ておきましょう。

まず第一に、パリ改造の一つのねらいは、ナポレオン三世という皇帝を称した人が政治的リーダーシップを取ったわけで、その首都すなわち帝都を世界に冠たるものにイメーჯアップする、ということです。政治的権威の発揚という点では、絶対王政下に始められたバロック的な空間構成というものを非常に重視しました。真つすぐに通りを抜き、その視線の先にモニュメンタルなものを巧みに配置して、シンボリックな効果を狙うものです。これは、たとえば岩倉使節団がパリに入ってシャンゼリゼを見て「おー」といったたまげたようですが、そういう彼らの印象につながってきます。

しかし第二に、バロック的な空間構成というだけならすでに絶対王政下から始まっていた動きなのですが、さらにこの時期には、工

業化の本格的な展開に対応した都市づくりがこれに加わります。ナポレオン三世は時代錯誤的などころもありましたが、富国強兵、殖産興業をつよく推進した人でもありました。大通りを通すのはパースペクティヴをもたすためだけでなく、人や物の動きを順調にする目的もありましたし、さらに鉄道駅を都市への玄関口として重視しました。あるいは物流のための市場の整備というのもそうです。駅や市場の建物には、新しい時代を映した鉄骨とガラスを組み合わせた建築が使われました。

第三には、以上の点とも関わりますが、道路開設を主軸にした都市構造の改造という展開が取られました。このオスマン化といわれる大改造が、近代都市計画の先駆とされる所以でもあります。幅の広い直線道路と環状道路とを組み合わせて、要所には広場を配置してゆきます。こういった展開をするのに、既存の密集街区を撤去して道路を設置し、その道路沿いに再開発を展開するという、スクラップ・アンド・ビルド方式が取られました。これは一種のスラム・クリアランスでもあったのでして、これが第四のポイントでしょうか。

ただし、ちょっと注意していただきたい点に、ついでながら言及しておきたいと思います。よくオスマンの改造にかんして、つぎのようにいわれるのを耳にした方もいらっしゃるのではないのでしょうか。現在こうした大通りを自動車が発達していますので、オスマンの改造はそうした自動車時代にも耐え得るような道路構造を用意したすぐれたものであったという評価ですね。あるいはまったく逆に、自動車交通を主人公にしてしまうような、都市のヒューマンスケー

ルを忘れてしまった機能主義の産物である、という否定的評価です。これらはいずれも、ある種のアナクロニズムともいうべき評価のようになっています。自動車が開発されて実用化してゆくのは一八九〇年代末から、二〇世紀初頭のことです。したがってオスマンたちには、自動車のことなどぜんぜん念頭にはなかったのです。

岩波文庫版の『回覧実記』には、うれしいことに、当時久米たちが現地で入手した図版が入っていますが、たとえばそのコンコルド広場の版画をご覧ください。コンゴルトと書いてあるのがそれでして、広場の真中にオプリスキ、つまりオペリスクが立っています。じつにのどかな遊歩空間になっているのが分かります。現在では自動車ぐるぐる走っていて、車をさばくにはよいのですが、人が歩いてわたるには命懸けです。たしかに改造計画には交通の流れをよくするという発想はありましたが、もちろん自動車時代を予見していたわけではなくて、むしろ遊歩空間や緑の空間を同時につくってゆくことと結びついていたのです。有名なシャンゼリゼ、『回覧実記』に「凱旋門通り」という図版が入っている大通りにしてもそうですね。プロムナード、つまり遊歩空間の開設にはたいへん力がこめられていたのでして、そのリーダーシップをとったのは、オスマンの右腕の技師で、オスマン退任後もパリの市の技師として都市改造の展開に君臨したアルファンという人物でした。彼が中心となつて作成した大判の報告書と図版は、ほとんど芸術的といつてよいほど見事なものです。

話をもとに戻します。第五のポイントとして道路の開設には、上下水道の整備があわせて展開されたということが指摘できます。当

時、社会衛生は大問題でしたから、都市のインフラ構造の整備が大きくすすめられたわけです。下水道溝の見学は、当時すでに現在同様にできましたので、久米たちも探訪して記録を残しています。

さらに指摘すべき点は、街路樹だけではなく、各種の公園や文化施設が都市施設として重視され、実際に整備され、配置されていたことです。

以上のような特徴をもった都市の改造がかなり進んで、しかし大改造であったためなおまだその途上にあったのが、久米たちの訪れたパリでした。以下、『回覧実記』にそのパリがどのように描かれているのか、何点かについて捉えてみたいと思います。

三

先ほどいきましたように、明治五年一月一六日、西暦一八七二年一月一六日、ロンドンを発った一行はドーヴァー海峡を渡ってカレーというところにつき、汽車で北フランスを抜けてパリに入りました。その時の第一印象をこう記しています。

午後一時食了へ、汽車二上り南発ス、是ヨリ大陸地ノ土壤ニシテ、広平ノ原野、海浜ニ接シ、一望曠濶ニテ稍岡坡の起伏ヲ存スルヲミル、其勢甚タ緩ナリ、土色黄ニシテ石礫ヲ雜ニ、英國一般ノ野ヨリモ瘠薄ヲ覺フ、道路ノ傍、田圃ノ畔ニ、広葉樹ヲ植エテ中林トスヘ幹ヲ存シ年々枝ヲ茂モノ、草モ亦滋ナラス、村屋及ヒ駅舎ノ建築、ミナ英國ト風ヲ異ニス、村落寥落トシテ、富潤ナラサルヲ覺フ、是ヨリ原田毎トシテ、到ル処ミ

ナ耕作ノ田圃、何ノ風景モナク、途上ニテ日没シ、総テ一百七十六英里半ヲ走り、六時ニ巴黎府ノ「デリスト」駅ニ達シ、馬車ニテ巴黎ノ市街ヲ走ル、晴嶋タル層閣、街ヲ挟ミテ聳へ、路ミナ石ヲ盤シ、樹ヲウエ、気燈ヲ点ス、月輪正ニ上リ、名都ノ風景、自ラ人目ヲ麗シ、店店ニ綺羅ノ陳ネ、旗亭ニ遊客ノ群ル、府人ノ氣風マタ、英京ト趣キヲ異ニス、既ニシテ「シャンゼルセー」ノ広衢ヲ馳セ、「アレチツリヨン」門前ナル館ニ著セリ、

鉄道沿いに見える北フランスの田園の情景がとても淋しいものだということが、まず印象として書いてあります。たしかに一二月のこの時期ですから、分らないではありません。パリ一带はサハリの緯度ですから日没も早く、暗いなかパリに着く。その到着したパリが非常に光り輝くイメージという対比が、じつに鮮明に表現されています。パリのデリスト駅に着いたとありますから、発音からしてガールデスト、東駅なんでしょうけれども、ちょっとおかしいのは普通なら東駅には着かないんですね。カレーからだとな北駅に着くはずなんです、なにか事情があったのでしょうか、あるいは北駅と東駅とはすぐとなりと並んでいますので、久米の記憶違いかもしれません。似たような事例はあとも出てまいりますが、当時すでに立派な地図を簡単に手に入れることだってできたことを考えますと、地図で自分たちの位置を確認するといった認識態度が、まだなかったのだろうかとか疑問が湧いてきます。これはまだ疑問のままです。

高い建物が道の両側にならび、その道にはみんな石が敷いてある

し、街路樹が植わっている。そしてガス燈がならび、連なる店の明かりが見事なさまに圧倒されるわけです。そして、ロンドンとならぶ一種の世界都市だという認識があったということが、つぎの表現からわかります。

歐洲大陸ノ都会ニテ、世界中、只倫敦ヲ除ク外ハ、此ト盛ヲ較ヘル都府ナシ、其壯麗ナルニ至リテハ、実ニ世界中ノ華嚴樓閣ノ地ナリ、○百年以前マテハ、此府ノ街路狹隘ニテ、屋廬モ大小相雜リ、妍醜錯雜ニテアリシニ、第一世拿破崙、絶倫ノ大威カヲ以テ、各国ニ捷テ収メタル財宝ヲ傾ケテ、此府ノ觀美ヲ輝サント、遂ニ矮屋小舍ヲ毀チ、中ニハ大厦ヲ取除ケテ、

ただ、「第一世ナポレオン」が都市を美化せんとして改造をはじめたという主旨の記述がありますが、これはどうも変です。たしかにナポレオン一世の時代にも若干そういう動きはありますが、おそらくナポレオン一世と三世の事業を取り違えているのでしょう。今日はほかにはあまり言及しませんが、『回覧実記』の随所で歴史的な説明が加えられていて、のちの歴史家としての久米邦武をうかがわせるところが十分にあります。しかしかなりの箇所、種本が間違っていたのか、現地で得た説明自体が間違っていたのか、彼のメモが違っていたのか、その根拠はよく調べないと分かりませんが、取り違えに出くわします。歴史的な説明の取り違え以外で、いちばん大きな取り違えは方角です。パリは中心をほぼ東西にセーヌ川が流れていますから、どうしてそういうことになるのかよく分かりま

せんが、北と南が逆転していたり、東と西があべこべだったりで、不思議ですね。想像ですけれども、あちこちの都市を動き回り、そのときどきの位置や方角をあまりメモしていなくて、あとで文章にするときにずれてしまった、というのがいちゃばん考えやすいのですが、この点でも、地図を持ち帰って見なかったのだろうかという疑問が湧いてきます。

ロンドンとの比較はほかのところでも言及されています。ニューヨークの比較も出てまいります。「新約克」と書いてニューヨークですから、どうも私どもには、先ほどのナポレオンの漢字同様、ルビがふつてないと面食らいます。それは余談ですが、この三都の比較はなかなかおもしろいし、的確であるとも思います。これら世界三大貿易都市のうちニューヨークは、貿易のやり方が違うと指摘します。パリについての章ではあまり詳しくは書いていませんけれども、要するにアメリカ合衆国の場合には広大な西部があり、この農業地帯と東部の工業地帯との間でのやりとりがある。それがほかとはずいぶんちがうんだ、という点をきちんと認識しています。ロンドンの場合には、原料を輸入して国内で加工したのち輸出するという特徴を指摘します。

パリは工芸の地であり、流行の中心として「世界工産物ノ都市」だと認識しています。

○製造ノ諸品ハ、此府ニ於テ務メサルナシ、尤モ風流輕靡ノ工ニ長ス、^が画續、彫刻、ミナ高尙ノ韻致アリ、新奇ノ妙案ヲ出ス、^{いんち}歐洲貴族ノ交際ニ用フル言語ト、婦人ノ衣襟、^{けい}髻鬘等ノ風トハ、

巴黎ヨリ流行ス、歐洲ニテ都雅ノ枢軸タリ、家什、珍玩、金、銀、銅、玉ノ器、磁器、時儀、冠帽、紐釦、粧飾ノ具、工精ニシテ廉価ナリ、全府ノ利益、年年二千五百万弗ニ下ラス、職人ノ数ハ三十四万二千五百三十人ニテ、三億弗ノ価ヒヲ製シ出スト云、○故ニ此府ハ、歐洲全國ノ市場トナリ、欧米ノ工商、荷モ名アリテ其業ヲ盛ニスルモノハ、此府ニ出店セサルナシ、輸シ入レテ、又輸シ出ス、歐洲各国、及ヒ歐洲人種ノ住スル国國ハ、ミナ此都ヲ文明都雅ノ尖點トナシ、遠近ニ尊敬セラレ、英人ノ高慢ナルモ、婦人ノ風俗ハ、巴黎ノ新様ヲ模倣シ、露國ノ強大ナルモ、私人ヲミレハ都人士トナシ、巴黎ノ麗都ハ、天宮月榭ノ想ヒヲナス、抑ハ仏國ノ歐洲ニ尊敬セラレ、巴黎ハ文明ノ中枢トナリ、流行ノ利權ヲトルハ、其由来久シキコトニテ、已ニ「チャーレマン」大帝カ、三孫ヲ仏、奥、以ノ三国ニ分封シタル後ヨリ、歐洲中原ノ王公貴族ハ、其管下ヨリ出タレハ、仏語ノ歐洲ニ勢力アル基本トハナリタリ、

文明都雅の先端だというわけですが、その歴史的淵源に「チャーレマン」大帝、つまりシャルルマーニュ、カール大帝のことですが、そこまでさかのぼってみようというのがいったどこに由来しているのかは、よく分かりません。それはともかく、今風にいえばアートやファッションの中心としてのパリの位置はよく捉えられているでしょう。数字で明示しようとするのも、『回覧実記』全体を通しての基調的姿勢だと見えます。ある種の統計的な正確さで実態を把握したい、という姿勢ですし、数字で納得するという認識態度です。

ね。ヨーロッパでも、一八世紀末くらいからはっきりと統計の時代に向かう動きが出てまいりますし、一九世紀はそれがどんどん進んでいった時代です。これは近代的な合理性とビッターリ対応する動きなのですが、明治初頭のこの作品にそれと共通する認識態度がうかがえるという点は、たいへん興味が掻き立てられるところですよ。

パリのリュクサンブールという公園の近くに、国立鉱山学校があります。そこを訪れたときの記述があるのですが、学校に入ったところに大きな地図がはってあった。非常に克明な地図で、そこに土質だとか各地の産品などが書きこんである。こんな「周密ナル国図」が作れるなんてすごいと感心して、さすが「文明国ノ最上等」という評判がうなずけるという話があります。パリに代表されるフランスを「文明国ノ最上等」とするような見方は、行く前から意識として持っていたのか、それとも帰国後、『回覧実記』の刊行は五年後ですが、それまでに追加的な整理をした結果書いたものなのか、そのへんはよく分かりませんが、非常に強いイメージをもって文章を書いていることは確かです。

四

パリの文化イメージにかかわるような指摘は随所に出てきておりますが、では社会の実際の暮らし向きとか、社会風俗とでもいったらよいでしょうか、人々の動きがどうだろうかといった観察があるかといいますと、これがあまり多くはありません。この点は、『回覧実記』全体を通しての特徴の一つでしょう。それでもパリについては、いくつかの描写があります。たとえば「繁昌ノ枢」を形づく

る「ブードワル」、つまりグラン・ブールヴァールと呼ばれる環状大通りなどについての記述がそうです。「百貨ノ光彩ヲ輝カス」消費文化の様相が指摘されています。その続きには、つぎのような記述もあります。

「シチー」ノ旧街ハ、首尾不規則ニ交叉シ、其狹隘ナルニ至リテハ、両車モ容ル能ハス、此小街ノ上ヲ、玻璃ニテ上宇ヲ覆ヒタル所アリ、常ニ日光ヲ透シテ、風雨ヲ漏サス、常晴ノ街路ナリ、両側ノ塵ニ、百貨ヲ雜陳シテ売ル、陳ヲ化シ新トナス、是ヲ巴黎風ノ街トテ、白耳義、及ヒ伯林府ニモ模ス、亦一ノ繁華市場ニテ、往来ノ人、ミナ車ヲステ、此ニ集リ、陰晴風雨ノ日モ、徐歩徘徊、物ヲ買フヘシ、○巴黎ノ市中ハ、到處ニ酒店、割烹店、茶、咖啡店アリ、樹陰ニ榻ヲオキ、遊客案ヲ対シテ飲ム、盛夏ニ涼ヲ納レ、晴夕ニ月ヲミル、劇場、樂堂、処処ニアリ、所謂歌舞終日無感容ノ氣象ヲ顕セリ、

この文の前半は、パサージュにかんする着目です。要するにアーケード・ショッピング街みたいなものですね。半世紀のちになってドイツの哲学者ヴァルター・ベンヤミンが『パサージュ論』を書いて指摘することになりますが、新しい消費文化、資本主義的な都市社会の勃興を象徴するような現象としてのパサージュについて、『回覧実記』がすでに着目しているわけです。パリのパサージュは一九世紀前半に多く作られまして、とくに一八二〇年代に作られたものは三〇近い数にのぼりました。さきにふれたオスマン化といわ

れるパリ改造は、大通りを優先しましたし、デパートのような営業形態が脚光を浴びるようになってくると、つまり一九世紀の末には、こうしたパサージュは下火になってゆき、つい最近になって歴史的な再評価をうけて手入れが施されるようになったものです。ですから使節団が見たパサージュは、ほんらいの輝きを放っていた最後の頃だったといえるでしょう。

風俗描写という点では、あと学生たちについて簡単に数行描いています。「肩ヲ張り歩ヲ高クスルノ状アリ」として「酔ヲ尽シテ帰ル、イツクモ書生ノ状態ハ、カハルコトナシ」などとしているのがおもしろい。

先ほどあげました『成島柳北』のなかで前田愛さんは、『回覧実記』にとつてのパリと柳北のパリとを比較しています。ちょうど柳北や使節団がパリに滞在していた一八七三年一月に、第二帝政瓦解のちロンドンに亡命していたナポレオン三世が、かの地で客死しました。柳北は粹人でしたが、何といっても旧幕臣、したがって第二帝政の瓦解やナポレオン三世の客死は、柳北にとって幕府のそれと重ね合わされていたようであり、権力から外れたものの眼差し、いわば「敗者」の心情と視座を持つものであった。それにたいし、使節団にあったのは「勝者」の論理と視座だった、と。たしかにありうる推論でしょう。『回覧実記』ではナポレオン三世の客死について一行そっけなく記されているのみでし、大ナポレオンに比べると言及はきわめて少ないのもたしかです。

ただ前田さんはさらにそれに続けて、こうもおっしゃっていました。『回覧実記』の側には要塞と工場のパリがあり、柳北の側には

劇場と美術館のパリがある、とですね。たしかにロンドンを中心としたイギリス訪問のさいには、産業視察がたいへん重きをなしていたことは一読明瞭ですが、ことパリについては、どうもあたらないと思います。

パリの場合、文明ないし文化のイメージがつよく前面に出ていることは、ここまでの今日のお話からもお分りいただけるでしょう。ほかにもパノラマ館のことが「奇奇怪怪ナルコト、文明ノ精華トモ名ツクヘキモノ」として紹介されています。柳北も見てたまげているわけですが、要するに映画の前身にあたるような仕掛けですね。シャンゼリゼの一面に大きな円形のパノラマ館が当時あって、観客が真中に座っていると、周囲を絵に描いた場面がぐるぐる動いて臨場感を与える、という大がかりなものでした。

また『回覧実記』では「大書庫」、つまり国立図書館ですが、第二帝政下にラブルーストという建築家によって新築された巨大な図書館についても、その分類や収納、借覧の仕組みなどについて見学した報告を残しています。さらに付属の「博古館」にも言及して、ヨーロッパにおける歴史的な蓄積の厚さについて指摘しているわけです。どんどん新しくなる進歩の地だといっても、ものをやたらに捨てるようなことをしない、という認識も披瀝しています。『回覧実記』は大英博物館はもちろん、ヨーロッパ各地で博物館に着目しております。これは、のちに歴史家になった久米ゆえの着眼だったのでしょうか。そのあたりは、これから調べてみたいところですが、明治このかた日本は、歴史的蓄積にかんするシステムを十分に学んで取り入れたとはとても言えないでしょう。

はじめのほうでお話しましたように、第二帝政下の改造でパリのなかには大きな公園が配置されましたが、『回覧実記』ではブーローニュの森をはじめいくつかの公園についてもかなり詳しく説明しています。

五

『回覧実記』全体を通して、欧米の事物を正確に観察して、それから学びとろうという姿勢が非常にはっきり読み取れます。すでに脱亜入欧的な姿勢もですね。パリにかなしては、文明の拠点としての都市のあり方を観察し、学びとろうという姿勢がかなり明瞭に読み取れるように思います。これは、明治日本がかかえた都市の改編ないしは再構築という課題意識に、照応するものだったといえましょうか。もっとも現地へ行く前からそのような課題意識を持っていたのか、それとも現地で観察をして、帰国後の報告としてまとめる過程で、そのような性格が強くなったのか、そのあたりは今の段階では私には判断できません。もっと生の資料を、そのような観点から眺め渡してみる必要があるでしょう。

いずれにしても、都市施設とか公園、それから交通事情、あるいは上下水道やガス燈といった設備、これらの目にしたものを、先ほど指摘したような誤りは一部には含まれているとはいっても、当時としてはじつに正確に捉えているといつてよい。たとえば有名なパリの下水道設備についての見学と説明の文章など、簡略ではありますが、じつに正確です。なんとも臭くて、「久シク隧中ニ在リ難シ、洞ヲ出ルトキニハ、皆人ノ膚、血色ナカリキ」なんてなりな

がら、実地に見てみるわけです。制度や公的な説明だけに満足していないで、実情をしかと自分たちの目で確認しようとする積極的な姿勢は、あたりまえといえばあたりまえなのですが、しかし公的な使節団がいつもそうだとはいえない現実を考えると、やはり立派だったというべきでしょう。

ただ、そうして正確に捉えられる都市の施設や構造が、どのような方法で整備され、実現したものであったのか、そこまでは意識が及んではいなかったようです。パリのそのような施設や構造が現実のものになったのは、もちろん前史にあたる展開がありますけれども、せいぜい数十年來だったわけです。そのさいの全体の方向付け、今のことばで言えばディレクティブ・コンセプトという点や、それを実行に移すさいの行政のリーダーシップとか、現実化してゆく技術的な面の組織化とか、そうした戦略性というか組織論の強さが存在していたのですが、そこに向かう視線は『回覧実記』にはどうも読み取れません。そしてこの点は、現在にいたるまで日本の非常に大きな弱点の一つのように思えます。もちろん明治の初期でも現在でも、ヨーロッパ型の戦略や組織があったとして、それらを嚙呑みにする必要などないのですが、そもその戦略性や組織論の重要さへの関心がじつに薄いということは、ようするに計画が思い付きや場当たりで走ってしまいがちになるということでしょう。

最後はいささか歴史とは離れた大まかな話になってしまいました。しかし、この久米邦武の『回覧実記』は、読んでみますとじつにさまざまな想念を読み手にもたらしってくれるように思います。明治期の日本のリーダーシップを取ろうとしていた人たちが、何を欧米に

ついで感じ取っていたか、誤認も含めて、そこから何を引き出そうとしていたか、ということを考えるにあたっても、たいへんおもしろい、有効な資料でありそうです。もちろんパリの部分に限らず、これからいろいろな観点から読まれうる資料体のように思えます。

〔付記〕本稿は、一九九五年六月三日に行なわれた第一回学習院大学史学会大会における同題の講演を、整理したものである。聞き辛い講演テープを起こしてくれた大学院生諸君に謝意を表したい。また『米欧回覧実記』の引用はすべて岩波文庫版による。